

## 廣瀬君のこと

村田 全

一九五九年というと、もう半世紀近くも前のことだが、今もありありと覚えている。当時、立教大学の数学教室は現在（四号館）とは別の建物（六号館）の一、二階を占めていて、玄関脇に大学院研究室があった。そこに一群の新三年生が集まってデデキントの『連続と無理数』を読んでいたが、その発頭人の一人が廣瀬君であった。僕は野次馬根性から顔を出し、「二つ原文で読んでみないか」と誘いを掛けた。数学科の数人に物理学科の三年生二人（小嶋昭「元三菱原子力KK」、菊池順「早稲田大教授」）も加わって、とうとう夏休み前頃までには全員でドイツ語の原文を読み通した。そこまで来るとは思っていなかっただけに、こちらも乗ってきて、途中から

「数学的には『数とは何か、何であるべきか? (Was sind …)』の方が面白いし、ドイツ語はむしろやさしいから、済んだらこちらを読まないか」

とあふったところ秋口には実現して、終わった後は思い切ってGödelの「決定不能定理」の論文(Uber formal unentscheidbare Sätze……)に挑んだ。さすがに最後まで付いてきたのは廣瀬君と故佐藤總夫君(元早稲田大教授)、ほか一人二人だったと記憶する。この論文は当時、僕自身も読んでいたので、結構、本気になっていた

た。廣瀨君はそれをよく覚えていてくれて、僕の定年の時に配って貰った小冊子に、<sup>(1)</sup>

「(ゴデキントの本は) 当時は翻訳書がなく……その内容は『集合論の神話時代』といったもので、村田先生の御教示がなければ正確には読み切れなかつたろう」

などという一文を寄せて、僕を持ち上げてくれた。あの読書会のことは、四十年近い僕の教師生活の中でもひととき幸せな思い出である。

四年生になったとき、廣瀨君はあるいは僕に就くかと思っていたが、(この辺の記憶はおぼろながら) トポロジーをやると言つてその専門家(三瓶教授?)に就き、大学院では赤攝也さんに就いて本格的に基礎論を始めた。僕は大魚を逸したような氣になつて少し寂しかったが、彼が大をなすにはその方が正解だと思つて、むしろ若い彼の見識、眼力に感心した。彼は赤さんの指導の下で修士論文を書いたが、その公聴会で、折から盛んになりつつあつた「unsolvability of the degree」に関する彼の修士論文に接したときには、僕の期待が見事に実現したことを知つて嬉しかった。その後の彼の仕事については多くの人が語つてくれるであらう。

彼は秀才だったが、半面大変な野次馬であつた。数学科一年生の頃から力学や電磁気学など、物理学科の単位をいくつか取つたようだが、それは学問上の本筋のこととしても、放射線管理士の資格その他、色々な資格を貪欲に取つていた。また高校時代から水泳指導員の資格も持つていたし、空手の有段者と聞いた覚えもある。こういう学生は得てして散漫になるものだが、彼は見事に基礎論の専門家として一家をなした。今にして思うと、数学ではわが及ぶ所でなかつたの感が深い。

そのことの一面として彼は友情に厚い人でもあつた。呑み友達のこと(佐藤總夫君がいないのが残念だ

が)その方面の知友に委ねるとして、読書会の時にも落伍しかけた友人を励まして続けさせたし、またずっと後のことだが、僕に就いて基礎論をやった大学院生の相談にもよく乗ってくれた。あまり体を動かしたがない僕を誘って、家族つれで弗沢の滝に仲間と共に遊んだこともあり、彼らが(御代田の)別荘地で過ごした夏休みの旅行に誘われて、家族で志賀高原に出かける途中二日ほど同行したこともある。これは僕が今信州に暮らしている切掛けになった出来事で、もはや失われた四十何年前の、月見草咲く松林で車座で話合ったことなど、忘れがたい過去の一コマである。

彼は大分の出で、幕末の大儒、廣瀬淡窓につながると聞いたことがある。だとすれば、淡窓の名も健だから健君の名はそれを継いだのであるうか。彼が若年東都に遊学し、壮年は教育大からアメリカに研鑽し、それぞれ仕事でも遊びでも良き交友を持ち得たことを思うと、淡窓の有名な七言詩の起承

休道他郷多苦辛  
いうをやめよ他郷苦辛多しと

同抱有友自相親  
同抱友有り自ずから相親しむ

「同抱は同じどてらで暮らすような親しい関係」  
は確かに健君の一面を伝えている。「後あり」と言うべきであろう。

惜しむらくは好漢、神に愛されることのやや深きに過ぎたか、夭折とは言えぬにしても、もう少し生きて仕事を続けてほしかった。早稲田大学で行われた葬儀の時、赤さんが

「ああ、天われをほろぼせり、天われをほろぼせり」と天を仰いで嘆息したのを昨日のことに思い出す。多少蛇足になるが、これは孔子が高弟顔淵の早世を嘆いた言葉で（顔淵死。子曰、噫、天喪<sub>レ</sub>予、天喪<sub>レ</sub>予。『論語』）、彼にとって廣瀨君は顔淵のような存在だったのかと、しみじみ思ったことである。

## 註

(1) 村田全先生が立教大学を定年退職された記念に開催された記念会に頒布された『村田全教授定年退職記念会』（一九八九年三月）という小冊子。

この中に廣瀨健氏の小文が掲載されている。参考までにその全文を以下に掲げる。

## 一九六〇年ごろ

知人に「人生二十年説」を唱えている人がいる。その解釈を聴いたことはないが、「第一の人生」を学生時代の終りまで、「第二の人生」を……と考えてみると、なかなかよくできた人生観と思う。

私が村田全先生に会い、多くのことを教えて頂いたのは、私にとつての「第一の人生」が終るところで、これは当然、「第二の人生」に大きな影響をおよぼした。この意味で村田先生は私にとつて正しく「恩師」である。

村田先生に初めてお会いしたのは、正確には、一九五九年の春、三年生になったばかりのころで、「君、廣瀨君ですか？」と声をかけて下さったのが昨日のことのようである。

三年生になってからは、友人達と自主ゼミをやっていたのだが、村田先生の御推奨で、いろいろな古典を読んだ。たとえば、デデキントの「数とは何であり、何であるべきか」などである。当時は翻訳書がなく原文で読んだのだが、ド

(二〇〇四年三月)

イツ語の難しさもさることながら、その内容は「集合論の神話時代」といったものであり、村田先生の御教示がなければ正確には読みきれなかつたろう。先生は時間の許すかぎりこのゼミに出席し御指導下さった。

この時の仲間は、数学科の佐藤（早大・政経）、森谷（現姓浅野、東工大↓長岡技大）、高橋（東京農工大）、加藤（故人、明治学院大）、物理学科の菊池（早大・理工研）、小島（三菱重工↓NUS）達で、よく一緒にハイキングやキャンプに行くなどして遊んでいた。その時の写真を見ると、村田先生や先生の御子息、玲音君（現在では明治学院大助教授）の可愛い顔もうつっている。

四年になると、数学科の学生は純粹数学コース、応用数学コースに分れることになっていたが、純粹数学コースのメンバーは、上記の数学科の四名に私を加えた五名で、このコースには吉田洋一先生の関数論の講義があり、それには関数論演習が付随していた。村田先生はその関数論演習の担当を買ってでられた。そこで我々は演習問題でしぼられましたが、天気がよいと先生も御一緒に新宿御苑などで演習の時間を過したりもした。

四年のときは、三瓶与右衛門先生のゼミでトポロジーの勉強をし、大学院の入試はトポロジーをやるということを受けたのだが、その後、村田先生の御示唆で、ゲーデルの不完全性定理の論文を読んだこともあって、数学基礎論に転向してしまつたのであった。

今、想うと、学部三年のころから、大学院を修士コース二年、博士コースは一年で中退して、東京教育大（現、筑波大）の助手を二年、専任講師に昇格するころまでが、時間的に最も自由で、よく遊び、いくらかは勉強もして、一番たのしい時期だつたと思う。村田先生はその時期に親しく付き合つて下さり、私の「第二の人生」を応援して下さいたのであった。

村田先生は、私が大学院生のころ、一時、首の辺りを痛められていたこともあったが、その後は非常にお元氣である。最初に述べた人生論にしたがえば、村田先生は「第四の人生」が始つたばかり、今後の執筆活動などに期待したい。

- 
- 底本には、『廣瀨健の思い出』刊行会編『廣瀨健の思い出』（二〇〇五年四月）を使用した。
  - 「廣瀨」の表記は廣瀨先生が生前、雑誌原稿や単行本などの表記では右肩部分が「刀」の「瀨」を強く希望されていたとの記述があり、「廣瀨」に統一した。
  - PDF化にはL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub>でタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。